

2015/08/08

科学研究費補助金研究集会:「日本の功利主義研究を考える:『ジェレミー・ベンサムの挑戦』
(深貝保則・戒能通弘 編、2015年3月)を手がかりに」

『ジェレミー・ベンサムの挑戦』は何を目指したのか」

戒能通弘 (同志社大学法学部)

1. 『ジェレミー・ベンサムの挑戦』刊行の背景

(1) 解釈上の「リヴィジョニズム」=ベンサム研究の大きな転換

『著作集 (*The Collected Works of Jeremy Bentham*)』、『書簡集 (*The Correspondence of Jeremy Bentham*)』の編集、公刊 (1960年代後半～)。

⇒

編集面で大きな問題を抱えていた『ジェレミー・ベンサム著作集 (*The Works of Jeremy Bentham*)』(1838-43年)。文献面での整備の飛躍的進展。

リヴィジョニズム (1980年前後～)

『ジェレミー・ベンサム著作集』が見落としていたベンサムの草稿に光が当たる。フーコーやロールズに依拠した極端なレッテル貼りに抗する、解釈上の「リヴィジョニズム」と称されるベンサム研究の大きな転換。

充実するベンサム研究

ほぼ毎年刊行される『著作集』。全70巻ほどになる予定で、2015年8月現在、32巻(著作20巻、書簡12巻)が刊行。

研究論文、研究書の充実(P. Schofield, 'The Legal and Political Legacy of Jeremy Bentham,' *Annual Review of Law and Social Science* 9, 51-70, 2013を参照)。

⇒

国際功利主義学会 (ISUS: International Society for Utilitarian Studies) の開催と国際的なベンサム研究の盛り上がり (パリの Centre Bentham、イタリア、ドイツ、中国なども)。

(2) 日本におけるベンサム研究の盛り上がり

永井義雄 (1982). 『人類の知的遺産 44 ベンサム』 講談社

ディンウィディ, J. R. / 永井義雄・近藤加代子 [訳] (1993). 『ベンサム』 日本経済評論社 [原著 1989年]

永井義雄 (2003). 『イギリス思想叢書 7 ベンサム』 研究社

永井先生、音無先生、有江先生、深貝先生などのベンサム (ミル) 研究者の招聘

1994年8月に国際功利主義学会の第4回大会が中央大学の記念館で開催 (音無先生、土

2015/08/08

科学研究費補助金研究集会:「日本の功利主義研究を考える:『ジェレミー・ベンサムの挑戦』
(深貝保則・戒能通弘 編、2015年3月)を手がかりに」

方先生)。その後、1997年頃から、フレッド・ローゼン (UCL)、ポール・ケリー (LSE)、
フィリップ・スコフィールド (UCL)、デイヴィッド・リーバーマン (UC Berkeley)、マル
コ・グウィディ (Pisa)、ダグラス・ロング (Western Ontario)、ロジャー・クリस्प (Oxford)、
マイケル・クイン (UCL) などを招聘。 <『挑戦』あとがき (深貝先生) p. 381>

(3) 若手ベンサム研究者の充実

フレッド・ローゼン氏 (『著作集』編集主幹 1983-2003) による論文指導?

児玉聡氏主宰の「ベンサム研究会」(於:東京大学)

若手によるベンサムの翻訳 (2009年~)

インターネットを利用した翻訳検討会。ベンサムの主要著作 (『積義批評』、『統治論断片』、
『道徳と立法の諸原理序説』、『法一般論』、『高利の擁護』、『パノプティコン』、『存在論・フ
ィクション論』) の翻訳作業が進行中。

若手によるベンサム (功利主義) 関連の著書、翻訳書

小松佳代子 (2006). 『社会統治と教育—ベンサムの教育思想』 流通経済大学出版会

戒能通弘 (2007). 『世界の立法者, ベンサム—功利主義法思想の再生』 日本評論社

安藤馨 (2007). 『統治と功利—功利主義リベラリズムの擁護』 勁草書房

児玉聡 (2010). 『功利と直観—英米倫理思想史入門』 勁草書房

—— (2012). 『功利主義入門—はじめての倫理学』 筑摩書房

スコフィールド, P. / 川名雄一郎・小畑俊太郎 [訳] (2013). 『ベンサム—功利主義入門』
慶應義塾大学出版会 [原著 2009年]

小畑俊太郎 (2013). 『ベンサムとイングランド国制—国家・教会・世論』 慶應義塾大学
出版会

⇒

国際功利主義学会の第13回研究大会が横浜国立大学で2014年に開催されることが確定。
当学会への準備も兼ねて、深貝先生、有江先生の下、研究会を定期的開催。

2. 『ジェレミー・ベンサムの挑戦』の準備から構想へ

(1) 準備のための研究会

ベンサムの関心、近年のベンサム研究の「軸」に即した研究文献の検討 (以下は一部のみ)

科学研究費補助金研究集会:「日本の功利主義研究を考える:『ジェレミー・ベンサムの挑戦』
(深貝保則・戒能通弘 編、2015年3月)を手がかりに」

①言語論－認識論

De Champs, E., "The Place of Jeremy Bentham's Theory of Fictions in Eighteenth-century Linguistic Thought", *Journal of Bentham Studies*, vol.2, 1999. (高島さん)

Laval, C., "Le langage comme morale et législation", in *Jeremy Bentham: Le pouvoir des fictions* (Presses Universitaires de France, 1994) . (高島さん)

②快苦－安全－権利・正義

Postema, G.J., "Bentham's Equality-Sensitive Utilitarianism", *Utilitas*, 10, 1998.
(高島さん)

Kelly, P.J. 1990 "ch.4 Security, Expectation, and Liberty" in *Utilitarianism and Distributive Justice: Jeremy Bentham and the Civil Law* (Oxford University Press) .
(板井さん)

Lacey, 'Bentham as Proto-Feminists? Or an Ahistorical Fantasy on "Anarchical Fallacies"', *Current Legal Problems*, 51, (1998) . (安藤さん)

④パノプティコン－権力

Semple, J. 1993 "Plans, Visions, and Utopia"またさらに統治の問題を含めてまとめられている章。(板井さん)

-----"Conclusion" in *Bentham's Prison: A Study of the Panopticon Penitentiary* (Clarendon Press) . (板井さん)

ほかに、法－平和－グローバリゼーション、思想史等の軸も。近年の研究の理解の共有。

各自の問題関心を発展させる形で、アブストラクトを作成、検討→各章の準備稿執筆や翻訳を進めながら、各々にコメンテーターを付けての検討会も。

(2) 構想、基本的なスタンス (編者とナカニシヤ出版編集部米谷さんとの話し合い)

※深貝先生のメモより抜粋

①想定する読者層を念頭に置いた書物の特徴

- ・ 専門家のための専門論文集ではなく、学生向け入門でもない、その中間の性格。
- ・ 研究テーマに関心を持った際に有益なように、研究の手掛かりとなる情報を盛り込む。
- ・ 熱心な一般の読者層の関心にも応え得るように工夫する。

②書物の構成

- (1) ベンサムに即して、(2) ベンサムの受容・批判・変形および解釈の修正主義、
- (3) ベンサムの現代的可能性、の3つから構成。

⇒第I部「ベンサムの挑戦」第II部「ベンサム論の挑戦」第III部「挑戦する「ベンサム」」。

- ・ 全体を通じた総論ではなく、3つの部に分けて設定。本論として書かれる諸章の要約的紹

介ではなく、内容的な位置づけや広い観点の設定を与えつつ漏れた論点を補うことをも目指す。

- ・ローゼン、スコフィールド、ケリーの翻訳を第I部、第II部の相応しい個所に。
- ・書物の末尾に研究情報あるいは研究の手引きを、Bentham Project の Transcribe Bentham やさまざまな e-text の情報（およびこれらの有益な利用の仕方のヒント）なども含めて盛り込む。

③判りやすさの工夫

- ・文章表現、見出しの付け方などを含めて判りやすく工夫を施す。
- ・とくに ローゼン、スコフィールド、ケリーの翻訳についても、むろん厳密ではありながら日本語としての読みやすさを重視する。

→各翻訳の前に「訳者解題」を置く。

- ・ベンサムの auto-icon や hand writing など、相応しい章には適宜図版をも入れる。
- ・巻末の研究情報において、さまざまな学問的もしくは趣味的な関心を促すように誘う。

→巻末の「研究の手引き」。

④ベンサムの文献の参看について

今後の学術的研究にとっての目安になるような、ベンサム文献の表記の今日的標準形を提供することを試みる。ベンサムの文献の日本語表記の仕方、およびオリジナルや新旧の Works もしくはさまざまな編纂本などへの参看の雛形を用意する。

3. 『ジェレミー・ベンサムの挑戦』の概要、特徴

(1) 『ジェレミー・ベンサムの挑戦』の概要

☞本書の内容、目次については、ナカニシヤ出版ご提供のちらしをご参照下さい。

☞本書の概要については、別紙「各章の要約」をご参照下さい。

(2) 『ジェレミー・ベンサムの挑戦』の特徴

①多彩な執筆者

深貝先生（経済思想史、経済倫理学専攻）、有江先生（西欧知性史、ブリテン社会科学史専攻）、板井さん（社会思想史専攻）、高島さん（哲学・倫理学、言語哲学専攻）、小畑さん（西洋政治思想史専攻）、安藤さん（法哲学専攻）、戒能（英米法思想史専攻）

⇒

科学研究費補助金研究集会:「日本の功利主義研究を考える:『ジェレミー・ベンサムの挑戦』
(深貝保則・戒能通弘 編、2015年3月)を手がかりに」

ベンサムの扱った主題の多様性と、それを反映した現在の研究フィールドの多様性を、それぞれを専門とする執筆者によってフォローできているのではないか。日本では初めての、ベンサムに関するアンソロジーではないか。

②日本におけるベンサム、ベンサム研究への焦点

- ・明治期の日本におけるベンサムの摂取や翻訳の経緯、データベースの活用

<『挑戦』総論II(深貝先生) pp. 170-176>

- ・‘Utility’の訳語問題、功利主義文献の翻訳の整理

<『挑戦』第8章「功利主義はなぜ不評か」(有江先生)>

☞別紙もご参照下さい。(「要約」の次の、図表の1枚目左)

- ・日本においてベンサムへの関心が高まった2つの時期=明治維新、1990年代以降。

<『挑戦』あとがき(深貝先生) pp. 378->

③ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ、ベンサム・プロジェクトとのつながり

「30年近くの間、60数回の訪英、3度の在外研究を行った」<『挑戦』p.276註(8)>

有江先生を中心としたベンサム・プロジェクトとの強いパイプ

→

- ・ローゼン氏の初の翻訳、比較的容易であった *Utilitas* との交渉(ケリー論文)、スコフィールド氏が希望した論文の翻訳。

- ・ *The Old Radical: Representations of Jeremy Bentham* (University College London, 30 September-18 December 1998) の図版(表紙など)、マニュスクリプトの活用。

☞別紙もご参照下さい。(図表の1枚目右、2枚目)

- ・ベンサム・プロジェクト現責任者スコフィールド氏の好意的な反応。ベンサム・プロジェクトのホームページのNewsにも掲載いただく(<http://www.ucl.ac.uk/Bentham-Project>)。

※『週刊読書人』の「2015年上半期読書アンケート」で、森村進先生(法哲学)にも取り上げていただきました。

④多様なベンサム解釈の提示

ベンサムを過度に正当化することはしない。ベンサム解釈(権威主義的カリベラルか)は、各執筆者に委ねる。

→

- ・今なお、世界的に影響のあるH.L.A. ハートのベンサムの法理学の解釈(共通の語法の探求)を批判したスコフィールド論文(言語論、存在論に基づくベンサムの法理学は改革的なもの)。

<『挑戦』第2章「ジェレミー・ベンサムと H. L. A. ハートの「法理学における功利主義的伝統」>

- ・思想史の観点からベンサムの言語論の理解の精緻化を試みる高島さん論文。

<『挑戦』第3章「ベンサム言語論の挑戦」>

- ・ロールズを想起させる功利主義批判(≒少数者の権利を尊重しない権威主義的なベンサム像)に対するリヴィジョニズムからの反論。

<『挑戦』第5章「功利主義と配分的正義」(ケリー、有江先生・高島さん訳)>

<『挑戦』第6章「憲法上の権利と安全」(ローゼン、小畑さん訳)>

- ・基本的にリヴィジョニズムに沿った宗教論(小畑さん)、マイノリティー論(板井さん)、国際法論(戒能)。

<『挑戦』第4章「ベンサムにおけるキリスト教と功利主義」>

<『挑戦』第10章「功利主義とマイノリティー」>

<『挑戦』第11章「グローバリゼーションとベンサム」>

- ・「「邪悪なベンタム」という典型的なイメージからベンタムを救い出そうとする、それ自体新たな典型となりつつある読み)——80年代以降の主流となっただけの「新ベンタム解釈」のそれ——から敢えて離れ、ベンタムの立憲主義構想の「異様」な側面に注目」する安藤さんの論稿。

<『挑戦』第9章「統治と監視の幸福な関係」>

- ・フーコーのパノプティコン理解とは距離を置きつつ、一定の意義を認める板井さん論文。

<『挑戦』第7章「ベンサムにおける功利主義的統治の成立」>

⇒

国際功利主義学会を牽引している3名の海外研究者の代表的論稿、わが国のベテランから若手など、内外の最新の研究成果を揃え、ベンサム研究の「現在」を伝えることを試みる。

⑤ベンサム研究のコンパニオン

「ベンサム研究をめぐる状況が一変しつつあるこのような状況の下、学問の世界に足を踏み入れようとしている学部生、院生に対するコンパニオンとしての役割も」

<『挑戦』序論 p. iii>

⇒

- ・米谷さんのご尽力による詳細な索引(人名については、基本的にすべて拾う)。
- ・<『挑戦』総論 I, II (深貝先生) 末尾>の概念図
- ・<『挑戦』「研究の手引き」(板井さん)>
公刊テキスト、草稿、翻訳、研究文献、研究拠点、ベンサムゆかりの場所といった項目に分けて解説。

☞別紙もご参照下さい。(図表の3, 4枚目)